

災害と自然畏怖

別府史談会 会長 後藤重巳



昨年三月、この史談会総会で、開会に先立ち、東日本大震災の犠牲者に黙祷の礼を捧げてからまる一年が経った。わが国でも天変地異の大災害は、決して珍しくはないが、レンズを通して大津波襲来と凄惨な被害実況を動的に眼にしたのは歴史の初体験であった。津波の、想像を絶する破壊力と、それがもたらした惨状は、私どもにも自然の秘めた無限大破壊力への畏怖の念を、改めて痛感せしめると同時に、近時、急速に発達した映像技術の極致にも感服させられた。

嘉永三年（一八五〇）夏、中部九州を横断した大暴風雨の折、杵築藩では即刻、被害の詳細な調査と、翌年播種の種籾の確保・罹災民救済・土木復興対策などを講じたが、その後一年間を通して、災害時の民間非常食の探索や「唐芋」など地中に繁茂する作物の耕作奨励などを行った。飢饉食の確認や風雨の被害を受けにくい農作物作付けを通して不時の災害被害に対応しようとしたのである。自然に大きく依存する前近代社会にあつては、「自然への帰伏」が不可欠であつたからに他ならない。

私たちの別府は、豊富な湧出量を誇る温泉地帯であるが、地殻的には活断層など地殻構造は、他地方とは大きく異なり、マグマは地表に近く、大地震などの地殻変動は予断を許さず、九州東部では最も要注意環境にあると云われる。

今、別府では、自然に湧出する「ゆけむり」景観を国指定に格上げしようと画策し、豊富な温泉を観光資源として利用することばかりに奔走している。

東日本大震災と福島原発事故の関連を、当初は「想定外」「予想外」などと云う表現を不用意に濫用したが、確かに天変地変には、何らかの予兆があるものは兎も角、予知することは困難である。

先号でも述べたが、今日、大きく変質する「まつり」の発生は、元来、自然への感謝報恩の念、畏怖の念にあるものと考えられている。

私どもは、想定できない災害来襲に備えて、常に自然との対応を心得ていなければならぬ。

平成二十四年三月